

第一八回南のシナリオ大賞応募作品

プラットフォームで

登場人物

矢口実 (37)

サラリーマン

矢口百合子 (64)

実の母

三宅鈴子 (89)

実の祖母

幼児

幼児の母親

駅のアナウンス

「プラットホームで」のあらすじ

矢口実とは、母の百合子と祖母・鈴子が暮らしている養護老人ホームに面会へ来ていた。

鈴子が、「八女に帰りたい」と口走ったことに百合子がキレ、死ぬまで東京で過ごすんだと言い返す。鈴子はボケており反論しない。

最寄り駅のプラットホームで話す実と百合子。百合子は、八女で暮らしていた鈴子が本家との関係が悪くなり、ボケもはじまりだしたところを自分一人で東京まで連れてきた自負があり、実は実で、祖母が亡くなった後、お墓を八女に作ってやろうとしており、母子は対立する。そこに小説家である兄の話題も加わり、母子の話はさらにかみ合わなくなる。

会社を辞めようとしている実と、自分が死んだら海に骨を撒いてほしいという百合子は、電車がプラットホームに入ってきて、電車に乗り帰っていく。最終的に、百合子は、自分の意見を何一つ曲げることはなかった。

小さな音でテレビが流れている。  
遠くで、人の喋る声。

実「おばあちゃん。それじゃ、また、来るから」

鈴子「八女に、帰りたか」

百合子「お母さん。ここ、八王子。東京。養

護老人ホーム」

実「母さん」

百合子「もう八女には帰れないの。死ぬまで

東京なの。東京で暮らすの」

実「もういいって」

百合子「言わないとわからないのよ。この人」

実「やめなっ」

百合子「どうして？」

電車の通過する音。

百合子「どうしてよ」

実「わざわざ言わなくてもいいでしょ」

百合子「言わないとわかんないでしょ」

実「おばあちゃん、悲しそうな顔してたよ」

百合子「どうせすぐ忘れるわよ。ボケてんだから。私が、どんな思いで母さんを東京まで連れてきたと思ってるの。大変だったのよ。一人で八女まで行って」

実「それは悪かったと思ってるよ。あの頃は、俺も仕事がさ……」

百合子「あのまま八女で一人暮らしなんて無理だったわよ。もう80過ぎて。ボケも出てきて」

実「おばあちゃんも、向こうに帰れないのはわかってると思うよ」

百合子「どうだが」

実「せめてお墓だけでも、向こうは無理なのかな？」

百合子「お墓？いくらかかると思ってるの」  
実「いや、わからんけど永大供養的なさ」

百合子「母さん、お金ないわよ。アンタ、出せるの？」

実「兄さんにも相談するよ」

百合子「もう辞めて。お兄ちゃんは」

実「でもさ」

百合子「アンタ。お金のことになると、何で

もお兄ちゃんじゃないの」

実「いや、でも実際さ…」

百合子「また由佳里さんに嫌味言われるの母

さんなのよ」

実「別に、俺には何も言わないよ。あの人」

百合子「アンタはお兄ちゃんが大事にしてる

から」

実「母さんのことも大事にしてるだろ」

百合子「女の嫌なところを全部詰め込んだら、

あんな感じになるのよ」

実「由佳里さんて、そんな嫌な人かな？」

百合子「男には好かれるの。ちゃんと使い分

けてるから」

実「まあ、由佳里さんの話はもういいじゃん」

百合子「アンタが、お兄ちゃんの話とかする

からでしょ」

実「お墓のことはさ、何とかしたいよ。おばあちゃんの思いもあるしさ」

百合子「母さんの思いはどうなるの？」

実「いや」

百合子「本家と絶縁して肩身の狭い思いしてるくせに強がって一人で暮らしつづけて、何度も東京来なさいっていつでもずっと無視されつづけて。ボケてくれたからやっと言うこと聞くようになって、本家から逃げるようにこっちまで連れてきたの母さんなのよ」

実「母さん」

百合子「これまで、どれだけ母さんが苦労したと思ってるの（泣き出す）」

実「泣くなよ」

百合子「いつも母さんだけ悪者にして」

実「悪者になんかしてないだろ」

百合子「してるわよ。悔しい。家族のためにこんなに頑張ってるのに」

電車の通過する音。

実「しかし、電車こないな。この駅」

百合子「アンタが住んでる所じゃないんだから、5分に1本も来ないわよ」

実「あ、そうだ。俺、今の会社辞めようと思ってるんだ」

百合子「ちゃんとお兄ちゃんに相談しなさいよ」

実「小説家に何を相談するの」

百合子「会社に、なんかされたんでしょ？」

実「大なり小なり、なんかされてるだろ。サラリーマンは」

百合子「ちゃんと、取れるもんとってから辞めるのよ」

実「なんか、言い方、おばあちゃんみたいだな」

百合子「やめてよ」

実「喋り方とか、似てきた」

百合子「ほんと、ずっと仲悪かった」

実「よく喋ってたじゃん。昔」

百合子「お互い、ずっと合わないなって感じだったの」

実「全然気づかなかった」

百合子「お兄ちゃんは、ちゃんと気づいてたみたいよ」

実「そうなの？」

百合子「だから、ああいう仕事ができるのよ」

実「そうかもね」

百合子「あんな仕事、いつまでも続かないわよ」

実「なんでそんなこと言うんだよ」

百合子「才能なんて、いつまでも沸いて出てくるわけじゃないんだから」

実「あのさ、やめなよ。そういうの。自分の子供だろ」

百合子「ずっと観察されてる気分だったもの」

実「兄さん？」

百合子「そう。子供の時から」

実「え？最近じゃなくて」



百合子「そうよ。じっと見てる時あったもの。

母さんのこと。動き」

実「何、ソレ」

百合子「気持ち悪くって」

実「母さんってさ、みんな嫌いなんだね」

百合子「結局、アンタくらいいかもね」

実「俺のことは嫌いじゃないの？」

百合子「程よいもの」

実「程よい？」

百合子「程よくうざったくて、程よく鈍感で、

全体的に程良い距離がとれてる」

実「それは、褒めてもらってるのかな？」

百合子「向上心なんて、そんな持たなくていいの。

普通に生きて、普通に死になさい」

実「俺、まだ37だよ」

百合子「あつという間に60過ぎるわよ」

実「そんなもんかね」

遠くでトンビが鳴く声。

実「あれ？トンビかな」

百合子「八女にお墓なんか作ったって、結局、  
誰もお参りいかないわよ」

実「俺、行くよ」

百合子「本家のお墓がある墓地はやめてよ」

実「いや、まだ何も決まってるないけどね」

百合子「それに向こうに作るなら本家にも言  
わないといけないし、ソレ、母さんにやら  
せるの？」

実「いや、別に、俺がやってもいいよ」

百合子「アンタじゃ意味ないわよ。どうせ、

「百合子さんは？」ってなるから」

実「兄さんとも話すよ」

百合子「もう、めんどくさくしないでよ。い  
ちいち」

実「お墓参り。俺、行くよ。ちやんと。夏休  
みとかもあるし。年末も少しは休めるしさ」

百合子「休みは自分のために使いなさい」

実「いや、だから自分のためだよ」

百合子「自分のためじゃないでしょ。ソレ」

実「いや、家族のためじゃん」

百合子「もう死んだら家族じゃないでしょ。

終わり」

実「なんだよソレ」

百合子「母さんも、ボケたら介護施設入れてよ」

実「もう何回も聞いたよ。ソレ」

百合子「お兄ちゃんには言っているから。場所とかも全部」

実「そっか」

百合子「とにかくヤなの。あんな女に世話になるのは」

実「由佳里さん」

百合子「アンタは、ああいうの選ばないでよ」

実「俺は、きっと独身だよずっと」

百合子「それもいいかもね」

LINE通知の音（実のスマホ）

実「ああ。兄さんからだ。なんか、今日、実

家来るってよ」

百合子「来なくていいわよ」

実「一人で来るか聞く？」

百合子「やめてよ。ほんと鈍感ね」

実「なんでよ」

百合子「また裏で操作してると思われるじゃないの」

「

実「由佳里さん」

百合子「いちいち名前出さないで。ほんと鈍

感ね」

LINE通知音。

実「兄さん。おばあちゃんのお墓、探してく

れてるみたいだよ」

百合子「良いご身分ね。ほんとに」

実「兄さんなりに考えてるんだよ。忙しいの

にさ」

百合子「ほんと、悔しい」

百合子、泣き出す。

実「泣くなよ」

百合子「泣いてないわよ」

実「母さん」

百合子「もう、ほっといてよ」

幼児の駆けてくる足音。

幼児「大丈夫？おばあちゃん」

百合子「おばあちゃん？」

実「ありがとう。大丈夫だよ」

百合子「おばあちゃんに見える？」

幼児「お姉さん？」

百合子「おばあちゃんがいいかな」

幼児「おばちゃん」

百合子「ありがとう。何歳？」

幼児「4歳」

百合子「4歳。いいね」

幼児「うん」

幼児の母親「はるちゃん」

幼児「はい。じゃあね」

幼児の走り去る音。

実「子供って、やっぱりかわいいな」

百合子「母が死んでも、お葬式もあげないから」

実「そういうわけいかないだろ」

百合子「本家が東京までくるわけないでしょ」

実「別に、家族だけでいいだろ」

百合子「どうせ、死んだらわからないし」

実「いや、死んだら戻るんじゃないの。普通に」

百合子「そうなの？」

実「いや、わからんけど。そうかなって」

百合子「でも、いいわよ。直接、文句言われるわけでもないんだから」

実「幽霊になって出てくるかもしれないぞ」

百合子「まともになつてくれた方が助かる。

母さん、言いたいこと山ほどあるから」

実「幽霊と喧嘩するんだ」

百合子「ほんと、どれだけ苦しかったか」

実「兄さんの小説になりそうなネタだね」

百合子「それまではボケられないな」

実「そんなに溜まってたの？」

百合子「当たり前じゃないの。ほんと鈍感ね」

実「会社でもよく言われるよ」

百合子「良いのよ。出世なんかしないで。い

いの。普通が結局、一番得するんだから」

実「今の所、特に得はしてないなあ」

駅のアナウンス「まもなく、八王子行きの下

り電車がまいります。白線の内側までおさ

がりください」

百合子「：母さん死んだら、骨は、海に捨て

て」

実「どこの？」

百合子「どこでもいい」

実「福岡？」

百合子「沖縄とかがいいかな」

実「どうして？」

百合子「海が綺麗だから」

実「兄さんと話すよ」

百合子「そうね」

実「いや、また文句言われるかと思ったよ」

百合子「どうして。息子でしょ。二人とも」

実「そうだね」

百合子「お金の世話にはなりたくないだけ。

あの子には」

実「そうか」

百合子「母さん、これから年金で生きて、年

金で死ぬから」

電車がホームに入ってくる音。

実「帰り、なんか食べてく？」

百合子「母さん。お金ないわよ」

実「俺が出すよ」

電車が停まり、自動ドアが開く。



人が降りてくる足音。

百合子「大丈夫なの？」

実「大丈夫だよ。昼飯くらい」

百合子「会社、クビになるのに」

実「自分から辞めるの」

百合子「ちゃんとお兄ちゃんに相談するのよ」

実「小説家に何を相談するんだよ」

百合子「お兄ちゃんに相談してよ」

実「わかったよ」

実と百合子、電車に乗り込む足音。

百合子「お墓は作らなくていいから」

実「まだ言うか」

百合子「言うわよ。だってね……」

自動ドアの閉まる音。

電車がゆっくりと動き出していく。